

名作の舞台を訪ねて

——世界文学紀行にまつわるエピソード・余談——

定年後に始めた世界文学紀行

「ドン・キホーテ」と「東京のドン・キホーテ」の由来



「風と共に去りぬ」

“After all, tomorrow is another day”

日本語の本ではさまざまに翻訳されていますね。

「明日はまた明日の陽が照るのだ」「明日は明日の風が吹く」「何はともあれ、明日はまた別の新しい日なのだから」……あなたならどう訳しますか？



シニアこそ読もう「赤毛のアン」

永遠の純愛小説「ロミオとジュリエット」そして「シニアのローマの休日」は？

「ハムレット」

”To be or not to be, that is a question!”

「生きるべきか、死ぬべきか（「生か、死か」）それが問題だ」

ハムレットの懊悩



「若きヴェルテルの悩み」と「車輪の下」

二つの小説共に、最終部分で主人公が自殺しています。美しいライン川クルーズの写真を紹介しましょう。



「戦争と平和」と「罪と罰」

どちらも人間の生き方を根源から問う大作です。

「6月の花嫁 in Russia」のエッセイと写真をご紹介します。

「レ・ミゼラブル」

「？」「！」……本が出版された時の著者と出版社との間の世

界一短い手紙と言われている——

ああ、ハグできなかったマドモアゼル！

「レ・ミゼラブル」のミュージカルをオペラ座に見に行ったときの夢のような物語……

夢こそ未来を拓く力

文学紀行のその他の写真やレポートもホームページでご覧になることができます。

URL: <http://homepage2.nifty.com/donky/>

八王子市教育委員会の主催による講演。パワーポイントで 120 枚の写真を紹介しながらお話をしました。ページも長く重くなるため、ここでは 30 枚ほどのみを挿入しています。残りの写真はキャプション(赤字)でお許しください。

名作の舞台を訪ねて

——世界文学紀行にまつわるエピソード・余談——



▶ タイトル

ただいまご紹介いただきました清水武でございます。今日は文学紀行の講演にお越しいただきありがとうございます。最初に簡単な自己紹介をさせていただきます。

自己紹介

私は2001年に定年退職し、1年目には横田基地内にあるセントラル・テキサス・カレッジで英語とアメリカ文化について学び、2年目にはスペイン語を再度学ぶために、南スペインのマラガ大学に1年間留学しました。

現在は、都内で来日した外国人のアテンドや海外に留学する学生へのアドバイスを、また地元では、昭島市が主催するシニア向けの英会話教室の講師と、中学校のステップアップ教室で諸種の事情でクラスの出られない生徒の指導にあたっております。

またボランティアとして、NPO法人・立川多文化共生センターで三多摩地域の在日外国人の支援活動や視覚障害者向けCDに録音する原稿の執筆などをしております。

世界文学紀行を始める



こうしたなかで、10年ほど前から「世界文学紀行」を始めました。

今日はその紀行の中から面白いエピソードだけを抜粋してお話させていただきます。文学作品そのものについて興味のある方は、どうぞレジュメにあるHPのアドレスから「名作の舞台を訪ねて」のページをご覧ください。

私はこれまでの75年の人生を通算しますと、海外にいた期間が12年間ほど。現役時代に特派員として訪れた国、また定年後に文学紀行で訪れた国を合わせるとちょうど42カ国になります

この文学紀行で最初に取り上げた作品はスペインのセルバンテスの『ドン・キホーテ』。取材で訪問したのはちょうど出版400周年を迎えた年でした。

その後、「風と共に去りぬ」の舞台アトランタとニューオーリンズ、出版100周年だった「赤毛のアン」の舞台・カナダのプリンス・エドワード島、「ロミオとジュリエット」や「ベニスの商人」のイタリア、「ハムレット」の城があるデンマーク、ゲーテの「ファースト」や「若きヴェルテルの悩み」、ヘッセの「車輪の下」の生まれたドイツ、トルストイの「戦争と平和」、ドストエフスキーの「罪と罰」のロシア、そしてヴィクトル・ユゴーの「レ・ミゼラブル」のフランスなど、計

15作品の舞台を訪ねてきました。

どれも青春時代に胸躍らせた、また大人になって人生を深めさせてくれた作品です。

今日は、これらのうち10の作品に関係する100枚あまりの写真とその作品にまつわるエピソード等をお話しさせていただきます。

ドン・キホーテの由来

私は定年後の自分に「東京のドン・キホーテ」との名前を付けました。

——なぜ、私がドン・キホーテなのか？

それは、小学校の6年生までさかのぼります。学芸会にクラスで「ドン・キホーテ」の劇をすることになり、私が家来のサンチョ・パンサ役を演じたのがきっかけでした。

以来、その奇想天外なストーリーに惹かれて、少年向けの本を、大人になってからは全訳本を読んだものでした。また、信濃町にある日本スペイン協会で、原書による勉強会があったとき、1年間出席、さらに、松本幸四郎がドン・



キホーテを演ずるミュージカル「ラ・マンチャの男」も3回、**土塀から望むラ・マンチャの平原**見に行きました。かなりの凝り性だったといえるかもしれません。

正義を求め、悪と戦うために槍をかかえ風車に突進するドン・キホーテは理想主義の典型であり、それを止めようとする家来のサンチョ・パンサは物質主義の権化とも言えるでしょう。

二人の間でやり取りされる会話や諺は、実に示唆に富んでいます。

セルバンテスは58歳のとき前編を、68歳のときに後編を出版しました。亡くなったのは奇しくもシェクスピアと同じ1616年でした。

セルバンテスはスペイン文学の原点、シェクスピアは英文学の原点とも言われています。今年、2016年は、歴史的な文豪二人が亡くなってちょうど400年という節目になります。

▶ スペインの地図



ということで、400年前、槍を掲げ愛馬ロシナンテに乗っていたスペインのドン・キホーテに対して、私め、現代の東京のドン・キホーテは、槍の代わりにカメラを掲げ、馬の代わりに飛行機に乗って“見果てぬ夢”に向かって文学の旅を続けている次第です。<レジュメにあるイラストです>

文学紀行のほとんどは私一人の旅でしたが、このスペイン旅行に限ってはサンチョ・パンサならぬカメラマンも同行、日本風に言ったらヤジさんキタさんの楽しい珍道中となった

セルバンテスの生まれた家の前。私の右がドン・キホーテ、左がサンチョ・パンサ 次第です。

小説「ドン・キホーテ」でもっとも有名なくだりは、主人公のドン・キホーテが遠くに見える風車を邪悪な巨人と信じ込んで戦いを挑んだ場面でしょう。私はその有名な場面の舞台、ラ・マンチャを訪ねました。

▶ ラ・マンチャ平原の風車は今ほども回っていません。かつては風力を利用して粉ひきに活

用されていたものです。

➤ ドン・キホーテはこの風車を悪魔の巨人と信じ込み戦いに挑んだのです。

——本の中でもっとも有名なこの部分を名翻訳者・永田寛定訳で引用してみますと——

<浪曲調に>——この時、あの大野には今もある粉挽場の風車が三、四十あらわれた。ドン・キホーテは、それに目をとめるやいなや、従士に言った。「天はわたしたちの仕事を、願ってもみられないほど上首尾に、運んでくださるぞ。それ、あそこを見なさい、サンチョ・パンサ。山のごとき巨人が三十ぴき、いや、もちっとじゃろうな、立ち現れたではないか。かれらと一戦におよび、みなごろしにしてくれよう……」

「巨人がどこに」と、サンチョ・パンサがきいた

「それ、あそこに見える長い腕のやつらじゃ」と、主人が答えた。「なかには、腕の長さ二里に達するのさえ珍しくないぞ」

「おめえ様、待ってくんないせえ」と、サンチョ。「あそこにめえるは巨人でねえ。粉挽場の風車でがすよ。腕とめえるのがね、それ、風でまわって石臼を動かす、はねぎだあよ」

.....

サンチョの止めるのも聞かずにドン・キホーテは乗っているロシナンテに拍車をくれ、一ばん手前の風車に突いてかゝった。すると、槍先がはねぎにふれようとし時、にわかにかき起こった風が恐ろしい勢いではねぎを回転させたから、槍はぶち折れるし、馬と騎手はそっくりさらわれて、後方へぼんと棄てられ、さんざんな態たらくで、野っばらをころがっていった——



作品の全部を知らない人でもここだけは知っている方も多いでしょう。あまりにも有名なシーンですね。

ミュージカル「ラ・マンチャの男」でドン・キホーテがつぶやいています。

「人生自体が狂気じみているとしたら、一体本当の狂気とは何だ、本当の狂気とは。夢に溺れて現実を見ないのも狂気かも知れぬ。現実のみを追って夢を持たぬのも狂気だ。だが一番憎むべき狂気とは、あるがままの人生に折り合いをつけて、あるべき姿のために戦わないことだ」——

ドン・キホーテのことを“年老いた気が狂った爺さん”と見る人もいます。でも私には、滑稽な冒険譚もさることながら、狂気と言われながら、悪を懲らしめ、正義を求め、夢に向かって進む主人公の姿に惹かれるものがあるのです。

➤ エル・トボソにあるセルバンテス博物館です。「ドン・キホーテ」は聖書に次いで世界で最も多くの言語に翻訳されていると言われていています。その訳された本が陳列されており、全部で

54 カ国語の「ドン・キホーテ」がありました。日本語では1927年の高田早苗による最初の訳本のほか、その後の翻訳者による訳本も置かれていました。案内してくれたのは女性の館長。

- ▶ インタビューに答えてくれたエル・トボソ村の女性村長さん。スペインでは女性が活躍しているんですね。
- ▶ スペインの至る所にドン・キホーテとサンチョ・パンサの像があります。これは首都マドリードのスペイン広場にある二人の像です。
- ▶ このときの紀行文は郷里の信濃毎日新聞に5回にわたり連載され、それはまたセルバンテスの生まれたスペインのアルカラ市の新聞にもスペイン語で掲載されました。紙面にはくスペイン語を読む>
上部にインタビュー「タケシ・シミズ：日本語を話すドン・キホーテ」とあり、タイトルは「日本も多くのドン・キホーテが必要になってくるかも」となっています。

「ドン・キホーテ」は文学紀行の第一作目だったので少々詳しくお話ししました。これから全部の作品についてこのようにお話しするには時間がありませんので、作品についての山場またはエピソードの部分に絞ってご紹介していきたいと思います。

風と共に去りぬ

- ▶ アトランタとニューオーリンズの地図
- ▶ 映画の広告



人々の心を潤し感動を贈ってくれるもの——その一つが文学でありもう一つは映画ですね。

2006年、出版70周年を迎えた年、私は「風と共に去りぬ」の舞台となったアメリカ南部のアトランタ、ジョージア州、ニューオーリンズの“現在”を訪ねました。

今から半世紀以上も前、まだ自分が中学生の頃のことでした。信州のローカル線（飯田線）の駅前広場の看板に、当時としてはとてつもなく大きな映画のポスターが貼り出されました。鮮やかな色調に英語のタイトルが入った画面をバックに、豪放な男性と美貌な女性の接吻シーンが、子供心にも強烈な印象を残したものでした。

『風と共に去りぬ（“Gone with the wind”）』は、小説もですが、この映画によって世界中のファンを魅了したといえるでしょう。

マーガレット・ミッチェルが本を出版したのが1936年。映画はその3年後に公開されました。小説は長編で読了には結構な時間と努力が求められます。映画も4時間を超える長編ですが、10部門でアカデミー賞を受賞した映画史上、不朽の名作。波乱万丈のストーリーとロマンが一気に視聴者を惹き込んでいく。仮りに本を読んでいなくても映画を観ている人は多いでしょう。

この会場で映画をご覧になった方は何人くらいいらっしゃいますか？

ありがとうございました。

- ▶ アトランタにある著者マーガレット・ミッチェルが生まれ育った家です。
- ▶ ジョーンズボロの標識。一番下に「風と共に去りぬ」の伝説的な土地、とありますね。

私はまずアトランタに住む友人が運転する車でジョーンズボロを訪れました。物語の舞台「タラ」とされる土地です。

かつて南北戦争に向かう兵士たちを乗せた列車の通るジョーンズボロの駅舎が、今は『風と共に去りぬ』の博物館となっていました。館内には小説に関する資料、各国で出版された初版本、映画の作成時のエピソードや写真、撮影に使われた衣装等が展示されていました。

- ▶ ジョーンズボロの駅舎です。南北戦争で北に向かう兵士達
がここから列車に乗ったのです。
- ▶ 線路は今も残っていますが人を乗せた列車は走って
いません。時折、貨物列車が通ることもあるようです。
- ▶ 当時、兵士達を運んだが列車の絵ですね。
- ▶ 日本から天皇陛下、皇后陛下も訪問された記録が残っ
ていました。サンケイスポーツの紙面ですが、面白いタイト
ルがついていますよね。「スカーレット嬢『風と共にウェルカム』
「スカートを引き上げ、脚チラリ。両陛下ビックリ」なんて。



女性の館長は次のように語っていました。

「ええ、毎日、世界中から愛読者がやってきます。国内は全ての州から。国外で多いのはスイスとドイツかしら。先月はロシアから大勢、それに中東の国々からも来ましたよ。そうそう、タラの故郷アイルランドからも若い人たちが訪ねてきたわ。夏のシーズンには日本からも1 ヶ月に300人くらいはやってきますね」

▶ 当時の奴隷が住んでいた家です

物語はアイルランドから移住し、タラの農場主となったジェラルド・オハラ、妻である淑女エレンが奴隷を使いながら農場を営んでいます。わがままで気の強い夫妻の娘スカーレットと心優しい淑女メラニー、豪放で現実的な男性レットと軟弱な哲学青年アシュレを対比することによって、ミッチェルは読者の心をつかむのに成功しました。

戦争が始まると、南部の人たちは自分たちの勝利を疑わなかった。ただ、レットと、アシュレだけは南部の運命を予感していました。それぞれ対照的な性格を持つ人間が、このタラとアトランタを舞台に戦争のはざままで生き抜き、ある者は死に、愛への葛藤を繰り広げていったのです。

レットが手綱を取る馬車で戦火のアトランタを逃れ（映画でもミュージカルでも圧巻のシーンですね）、タラに帰ってみると母親は死に、父親は発狂し、奴隷は逃亡していた。食物もまったくない。絶望の底からスカーレットは立ち上がっていきます。

私には、ここでスカーレットの生きざまがかみ合ってくるのです。南軍が敗れ、貴族的な南部社

会は風と共に去っていった (A Civilization gone with the wind) 。彼女の最後の支えとなったのはタラの赤土でした。勝気だったスカーレットは、今度はその意志の強さで、自分の人生を開き、家族や周囲の人々も救っていきました。時代が、社会が混沌としているときは、勇気あるものが生き残っていくのですね。

➤ After all, tomorrow is another day.

物語は次の言葉で結ばれています。

“After all, tomorrow is another day” .

日本語ではさまざまに翻訳されていますね。

「明日はまた明日の陽が照るのだ」

「明日は明日の風が吹く」

「何はともあれ、明日はまた別の新しい日なのだから」

.....

すべてを失った後で、彼女が再び未来に向かって生き抜いていこうとする言葉として、私は次のような意味をこめて訳してみました。

「明日はまた新しい人生の始まる日」

その意味でこの言葉は、さまざまな苦難に直面している人々、人生のどん底で闘っている人々に、強い勇気と希望を贈ってくれるような気がするのです。

➤ 黒人解放運動の指導者、マーチン・ルーサー・キング博士が生まれ育ったアトランタの家です。氏の誕生日はアメリカの祝日にもなっています。

➤ リンカーン大統領によって奴隷解放宣言がなされましたが、実際には黒人の地位や待遇はほとんど変わらないままだった。キング博士はその黒人の地位を上げるための運動を進めました。” I have a dream” (私には夢がある) との魂を揺さぶる演説は、ケネディ大統領の就任演説と並んでアメリカの歴史の中で最も有名な演説の一つとなっています。最後は暗殺されてしまった。歴史を動かす偉人の宿命なののでしょうか。

➤ アトランタにあるCNNセンターです。世界のニュースを24時間送り続けているテレビ局の本部。見学コースがあり私もキャスターが世界にニュースを発信している現場を見ることができました。



➤ レットとスカーレットは新婚旅行でニューオーリンズに行きました。多くの観光客が訪れる明るいダウンタウンですね。

➤ ニューオーリンズはジャズ発祥の町。

➤ 町のどこに行っても、こうした路上でジャズを演奏するグループに会います。

➤ ミシシッピ川クルーズの汽船です。赤い水車が回転して進んでいく楽しそうな船ですね。

➤ このミシシッピ川のほとりで大道芸人の呼びかけで私も写真を撮りました。1カット5ドルだったような気がします。確かに作る表情がうまい。犬は模型です。

シニアこそ読もう「赤毛のアン」

▶ プリンス・エドワード島の地図

「風と共に去りぬ」の翌年は「赤毛のアン」の舞台を訪ねました。

「エッ！ いい年をしたオジサンが少女物語の舞台を訪ねるの？」——口にこそ出さなくても、我が“悪友”たちは心の中でこう思っていたかもしれません。私自身、最初はちょっとした気恥ずかしさも抱いていたのですが、それは今をときめく脳科学者・茂木健一郎氏のアン番組出演で消え去ったのです。

2008年3月、『赤毛のアン』100周年を記念する特集がNHKで組まれました。その番組の中で氏が言ったのです。

「若い時からアンのファンだった。でも、男が読んでいるとからかわれるので、自分は隠れて読んでいた」そして「古典は何度読んでも新しい発見がある」と。

その言葉に私も自信をもって取材準備を始めました。まずは作品の原書に挑み（比較的やさしい英語です）、NHKのアンについての英語番組を視聴、劇団四季でミュージカルも鑑賞しました。さらに、日本で最初の村岡花子訳（朝ドラ「花子とアン」の主人公ですね）と直近の松本侑子訳を読み比べ、松本侑子が東京・青山で直接担当した「原書で読む赤毛のアン」講座にも出席したのです。

▶ プリンス・エドワード島はカナダで最も小さな州で、大陸の東側のセント・ローレンス湾にあります。

▶ 6月半ば、カナダのプリンス・エドワード島に飛びました。グリーン・ゲーブルズのりんごの花がちょうど満開でした。孤児院にいたアンが初めてグリーン・ゲーブルズに着いたのも6月、りんごの花が白く咲きあふれていたころでした。一人で置き去りにされた鉄道駅から、マシューが手綱をとる馬車でやってきたのです。



▶ アンが住んでいたハウスには各国からの見学者が押し掛けていました。地元カナダの各地から、お隣のアメリカから。ヨーロッパからは主に東欧の国々。アジアからは日本、中国、韓国が多いといえます。日本からは若い女性と中年の婦人が目立っていました。

▶ アンの部屋ですね。写真に写ってはいませんが、この左には例の袖の肩のところが膨らんだパフスリーブのドレスが掛けられていました。

▶ 島に着いた翌々日からは、物語の舞台の本場でのミュージカル公演が始まりました。毎年、夏になると催されてきた公演は44回目。ガラ公演に先立って、全キャストが揃ってのサイン会と記者会見が行われました。

孤児だったアンがマシュー、マリラの愛情の中で健やかに成長していく半面、育てる二人は年老いていく人生の無常、人間の情愛の深さ・・・

マシューが亡くなり、アンが大学進学を断念、マリラを支え、再び自分の道を切り開いていこうとする最終幕は、観客の誰もが涙を誘われ、感動を禁じえません。

アンが「世界で一番美しいところ」と言っている島の美しい風景

- フレンチリバーと輝く湖水の遠景
- 恋人たちの小道
- お化けの森の案内板と、<次>お化けの森・・・真っ暗な夜に女の子一人で歩くのは怖い。
- 「グリーン・ゲイブルズのアン」博物館
- キャベンディッシュ村のアンとスナップショット
- 島を散策していると結婚式を挙げてきたばかりの3組のカップルに会いました。彼らは親切にもカメラにポーズを取ってくれたのでした。写真の調整が悪く左側の男性が抜けてしまった。



島をめぐる旅のなかで車椅子の日本婦人Kさんに会いました。九州の宮崎から羽田、成田、トロントの空港を経由して州都シャーロットタウンへとたどり着いた。60歳の誕生日を祝い、娘二人が旅をプレゼントしてくれたのだといいます。リウマチで足が悪く、娘さんの一人が付き添って人生で初めてとなる海外旅行とのことでした。

「車椅子で大変だと思いましたが、カナダに着いてみると、みんなが障害者にとっても親切で感動しました。40年前にアンを村岡花子さんの訳で読んで以来、その舞台を訪ねるのが夢でした。アン・シリーズも全部読みました。プリンス・エドワード島は、牧歌的な広々とした光景で心が洗われる思いです。空気も澄んでいて、持病のリウマチもあまり気にならなかった。何があってもくじけないアンの生き方は、40年来の自分の支えでもありました。送り出してくれた娘たちに、親切に面倒を見てくださったカナダの皆さんに心から感謝しています」

夢を抱いて努力していれば、いつかは実現できる。アンが教えてくれた一つの例のような気がします。

歳を重ねるにつれて夢を失い、身体だけでなく、心まで枯れてしまう人も多い。歳をとるほどにアンのような心のみずみずしさをもちたいものです。

シニアになって「アン」を読む、または読み直すところに、自らの心の若返りもあると実感します。私は今も「シニアこそ読もう『赤毛のアン』！」と訴えているところです。

- 島の小さな空港の中の掲示です。英語、フランス語、日本語・・・かなり多くの日本人が島にやってくるのがわかりますね。
- 著者モンゴメリーのお墓です。今は国立公園になっています。
- 彼女の墓石と墓地。
- モンゴメリーが作品を書くのに使ったタイプライターです。

文学作品の紹介が続き少しお疲れかもしれません。ここからは余談、面白い話だけを紹介していきたいと思います。

イタリアの各地を訪ねる

- ▶ イタリアの地図 北のミラノから入りベローナ<場所を指示>、ヴェネツァ、フィレンツェ、ローマと訪ねました。
- ▶ ミラノのカテドラル(大聖堂)。あいにく雨が降っていた。
- ▶ フィレンツェのミケランジェロ広場にあるダビテ像



ここで質問です。永遠の純愛小説「ロミオとジュリエット」の舞台はどこでしょうか？

そう、イタリアのベローナですね。ベローナの町にはジュリエットが住んでいたという館がありました。でも、「シェクスピアはベローナに来てはいない」という人もいます。館は映画が作られ作品が有名になってから作られたというのです。他の小説や映画でもこうした事例はよくあることですよね。

ここでは、ロミジュリの小説の最も有名なシーン。ベランダに出たジュリエットがロミオに向かって愛をつぶやいたシェクスピアの言葉を原文のままご紹介してみましよう。

O Romeo, Romeo! wherefore art thou Romeo?

Deny thy father and refuse thy name;

Or, if thou wilt not, be but sworn my love,

And I'll no longer be a Capulet.

What's in a name? that which we call a rose

By any other name would smell as sweet;

私などにはとても難しい中世英語です。英文学者・中野好夫さんの訳ではこんな風になっています。

<ジュリエット>

ああ、ロミオ様、ロミオ様！

なぜあなたは、ロミオ様でいらっしゃいますの？ Why are you Romeo?

お父様と縁を切り、家名をお捨てになって！ Thy → your, thou → you, wilt → will

もしもそれがお嫌なら、せめてわたくしを愛すると、お誓いになって下さいまし。

そうすれば、わたくしもこの場限りでキャピュレットの名を捨ててみせますわ

名前にどんな意味があるというの？

バラという花にどんな名前をつけようとも、その香りに変わりはないはずよ。

さすがに名訳者の日本語は美しく素敵ですよ。このバラの話しの部分は「赤毛のアン」でアンの言葉にも引用されています。



- 雨の降る夕方写真が残念ながら暗くなってしまった。ジュリエットがロミオに愛をささやいたという2階のベランダもありました。
- 階下の庭にはジュリエットの等身大のブロンズ像があり、その細い手やふっくらとした胸は観光客が触ったり撫でた跡でとりわけ光っていました。触れば恋が実るとの言い伝えがあるというのです。
- 館の入り口の壁には世界から寄せられた恋人達のラブレターが場所が無いほどに貼られていました。

シニアの休日 in Rome

➤ ローマにあるスペイン階段



文学紀行ではありませんが、イタリア滞在でもう一つのハイライトは、映画「ローマの休日」です。制作されてから半世紀あまり。白黒の画面ながら、あの新鮮な感動と、鑑賞後に残るほのぼのとした情感は変わっていませんね。アン王女を演ずるオードリー・ヘップバーンはあくまでキュートだし、新聞記者を演ずる渋いグレゴリー・ペックもおおらかな人間

愛がにじみ出ています。

その映画のロケ地をたどって「シニアの休日 in Rome」としてやってみました。



- 「真実の口」——嘘をついた人がこの中に手を入れると決して抜けない、と

いう。王女がおずおずと手を入れていたシーンが思い出されます。でも、実は円盤は古代ローマ時代のマンホール蓋だったといひます。よくぞまあ、上手に伝説を作り上げたものですね。

- ローマのコロセウムの外側と内側。
- 「ベニスの商人」の舞台・ベニスには運河が張り巡らされ、まさに「水の都」ですね。
- ローマ市の一角にあるバチカン市国。バチカン宮殿とその前の広場です。法王のミサともなると広場がすべて埋め尽くされるのです。



(デンマーク・ドイツ)

ハムレット

- ドイツとデンマークの地図
- シェクスピアと言えは四大悲劇の一つに「ハムレット」が挙げられます。その舞台はコペンハーゲン近くのヘルシンゴーにあるクロンボー城。イタリアを訪れた翌年、デンマークを訪れました。

「ハムレット」の冒頭はこのクロンボー城に、叔父に殺された父親の亡霊が出るころからで

す。バルト海岸にある城はいかにもそんな趣をかもし出していました。



私は物語のイメージをたどりながらお城の中を訪ね歩きました。でも、母親の王妃との会話はどこの部屋でなされたのか、ポローニアスの刺された事件現場はどこなのか等はわかりません。

そこで入場料を払った受付に戻ると、その日の責任者らしい男性に聞いてみました。両手を広げジェスチャー豊かに話す責任者からは予期もしなかった言葉が返ってきたのです。

「Nobody knows! (誰もわかりませんよ)」。氏の話しっぷりからは「そんなこと言ったって、そりゃ無理ってもんだぜ!」といった少々くだけた訳が合うでしょう。だって架空の話の舞台がどこかはわかるはずがありません。

それでも、訪問記のなかには、案内嬢が「ここがオフィーリアとハムレットが言葉を交わした場所でありまして・・・」と説明された、なんて記述もありました。観光地としてはそこまでサービスしないと訪問客の期待に応えられないからでしょうね。

シェクシアはデンマーク国民史をもとに『ハムレット』を書き、このクロンボー城の名を不朽にとどめました。その主人公の性格や発した言葉の解釈については、長い文学史のなかで、最も論議された、最も魅力的な人物の一人でしょう。

➤ **”To be or not to be, that is a question!”**

「生きるべきか、死ぬべきか（あるいは、「生か、死か」）それが問題だ」。

とりわけ人口に膾炙している言葉は”To be or not to be, that is a question!”ですね。様々に訳されていますが、最も受け入れられている訳は、「生きるべきか、死ぬべきか（あるいは、「生か、死か」）それが問題だ」だと思います。

中世の英語を翻訳できるような力は私にはとてもありませんが、それでも再度、作品に目を通し、舞台の現場を訪れた自分としてはこの部分を次のように訳してみました。

「To be 何が真実なのか、or not to be 何が真実でないのか、嘘なのか、that is a question! それを究めるのが最重要課題である」

これは、人間対人間の葛藤の中で、正義と真実を求めて懊悩するハムレットの生命からの叫びなのです。そしてこの重い言葉は、今を生きる私たちにも、人生のあるべき生き方とは何なのか、本当の正義とは何なのか、根本的な問いを投げかけているような気がするのです。





- ▶ デンマークではアンデルセン博物館（後方の建物）も訪れました。その庭で撮った女子高生たちの写真です。この真ん中のピンクの衣装を着た子が「私たちを撮って！」と頼んできたのです。みんなかわいい子達ですよ。旅ではこんなハプニングもあるんですね。
- ▶ デンマークは自転車の国。自転車専用の道路があります。朝の出勤時の光景です。
- ▶ コペンハーゲンの港町。カラフルな建物が並び海の

ほとりでは多くの市民が憩っています。

<前半終了>

ここまでの5作品の紹介で前半を終わりたいと思います。少しまじめすぎる話で皆様もお疲れかもしれません。後半は趣向を変えて、作品紹介は短くして、もっと気楽な楽しく面白い話と写真の紹介をしていきたいと思っています。どうぞくつろぎながらお聞きください。

<休憩>

「若きヴェルテルの悩み」「車輪の下」

デンマークの隣のドイツではグリム兄弟の博物館も訪ねました。両博物館とも子供たちのための童話や関係の品々が展示されていました。



左：ヘッセの生まれた家（左から 2 軒目）
右：ゲーテ・ハウス。フランクフルト市内にありゲーテが生まれ育った家で、今は博物館にもなっています。



さて、日本でよく知られたドイツの作家はゲーテとヘッセです。ゲーテではまず「ファースト」ですね。ファウスト博士

が悪魔メフィストフェレスと出会い、死後の魂の服従を交換条件に、現世で人生のあらゆる快楽や悲哀を体験させる契約を交わす、といったストーリーです。

主人公のファーストは、ハムレットとドン・キホーテとともに、西洋の小説の三大ヒーローと呼ばれてもいるようです。

「若きヴェルテルの悩み」は日本の若者の中で多く読まれてきました。青年ヴェルテルが婚約者のいる身である女性との恋に陥り、叶わぬ思いに絶望して自殺するまでを描いたものです。

高校時代に愛読したヘッセの「車輪の下」も、主人公の若者ハンスが将来を嘱望されながら最後は酒に酔って川に落ち溺死するというストーリーです。

どれも深く重い小説です。すでに前半の 5 作品の紹介で、私の頭も皆さまの頭もかなり重くなっていると思いますので、後半の 5 作品については、取材の途中で出会った楽しい写真をご紹介しますと思います。

作品そのものについてはホームページの「名作の舞台を訪ねて」に多くの写真と共に詳しく書いていますので、関心のある方はどうぞご覧になってみてください。

まず、ドイツではゲーテハウスのあるフランクフルトから乗ったライン川紀行の写真をご紹介します。今申し上げました三つの作品の取材の合間に足を伸ばしたものです。さわやかな晴天と新緑が目を楽しませてくれました。

- ライン川沿いでは、ちょうどオートバイのレースが行われていて、クルーズ船と競うように走っていました。
- 「うまく撮ってくれよな！」なんてカッコいいポーズを作ってくれます。
- クルーズ船の甲板です。男性の観光客の一部は上半身裸になり、デッキからライン川沿岸の光景を楽しんでいました。たぶん一年中、日光の少ない北欧からの人たちで、少しでも太陽を浴びようとしているんですね。
- ライン川の沿岸にある村の教会です。いかにもドイツ風の落ち着いたたたずまいをみせています。



➤ ライン川沿岸には中世時代の城がいっぱい並んでいます。これはその典型的な一つです。沿岸に並んで飛び飛びにある城は関所みたいな機能も持っていたようです。

➤ 山の中を流れているようなイメージですね。

➤ 約 1 時間の乗船の最後の部分の下流には「ローレイ」の岩、というか山がありました。この場に来るとクルーズ船からはあの懐かしい「ロー

レイ」の曲が流れてきました。この部分のライン川はかなり急カーブで危険な場所。若い女性の歌声に惹かれて船頭が舵を誤り、船が沈んだという伝説も、なるほどなあ、と感じられてきたものです。

- ここはライン川沿いの高台にある「ゲーテ展望台」。ここで作品の構想を練ったなどとも言われています。
- 下はライン川ですが、周囲の樹木が大きくなり残念ながらよく見えませんでした。対岸の畑はブドウですね。
- はい、こちらはヘルマン・ヘッセが生まれ育ったカルフの町です。赤い屋根がいかにもドイツ的。地方の都市や村ではよくこんな光景が見られます。
- ヘッセの博物館です。ゲーテ・ハウスとも建物がよく似ていますね。訪問者が記帳できる冊子があったので、私も高校時代から愛読してきた「車輪の下」の感想を英語で思いっきり書き綴ってきました。
- ヘルマン・ヘッセはとても近眼だった。氏が使っていた眼鏡です。

- すぐ近くの橋の上にはヘッセの像があり、そこで高校時代から抱いていた思いを記念にとどめたところですよ。

「戦争と平和」と「罪と罰」

➤ ロシアの地図

デンマーク、ドイツ訪問の翌年にはロシアを訪れました。取材対象の作品はトルストイの「戦争と平和」とドストエフスキーの「罪と罰」でした。

「戦争と平和」はモスクワが主な舞台、「罪と罰」は旧首都だったサンクトペテルブルク(かつてはレニングラードと呼ばれていました)。

いつもは自分一人の取材旅が多かったですが、ロシアでは言葉も全く通じないことから現地でロシア語の通訳も頼みました。

モスクワに到着するとそのまま飛行機を乗り換え、最初にサンクトペテルブルクに向かいました。

- モスクワからサンクトペテルブルクへの飛行機の窓から撮影した白夜です。午後 10 時過ぎというのにまだ太陽が沈んでいないのです。
- サンクトペテルブルクはロシアの旧都(日本の京都みたいなもの)であちこちに運河が流れとても美しい街。「北のベニス」とも呼ばれているようです。
- 道路の一角にも花が植えられていて目を楽しませてくれます。
- エルミタージュ美術館。エカテリーナ 2 世の宮殿だったといいますが、さすが外観も内部も豪華な作りです。世界の 4 大美術館の一つだと言われているようです。
- ロシアの地下鉄は一見、また一度、乗ってみるに値します。日本の地下鉄よりもはるかに深く、エスカレーターも長い。そして構内には絵や彫刻が飾られていてちょっとした美術館の趣があります。

「一つの小さな罪悪は百の善行によってつぐなわれる」「選ばれた非凡人は、世のため社会のためにそのお金を使うならば、社会的に無価値な人間を殺して金を奪うこともできる」——これが「罪と罰」の物語の主人公・ラスコリニコフの考え方でした。

ラスコリニコフの“殺人哲学”は不合理と不平等が消えていない現代社会でも共鳴する若者がいるかもしれません。人間の行為の善悪についての重い問いかけは、不平等社会が解消されない日本また世界の現代にも通じているようです。

作品の舞台に関する写真も多くありますが、ここでは略させていただきます。ドストエフスキー像



エルミタージュ美術館



続いて『戦争と平和』の取材ではモスクワ市とそこから 200 キロ南にあるトルストイの生家と博物館も訪ねました。まずは首都モスクワの写真から：

- クレムリン宮殿ですね。今は見られなくなりましたが、30 年ほど前までは、この前の広場で、現在、北朝鮮がしているような軍事パレードが行われていたのをよくテレビで見たものです。

- クレムリン宮殿前の広場を挟んである Gum 百貨店。ロシアで最も大きく高級な百貨店とのことです。
- モスクワのトルストイ博物館に置かれているトルストイの像です。
- トルストイの生家、ヤースナヤポリャーナにあるトルストイのお墓です。長さ 3 メートル、幅 2 メートルほどの墓は雑草で覆われていました。これはトルストイ自身が、自分の墓はできるだけ質素に、と遺言したからだと言われていています。ご存知のようにトルストイと言えば歴史的にも世界的にも大作家の一人です。豪華な墓を作ることに専念する一部の有名人のことを思うと、いろいろと考えさせられます。



トルストイ像

さて、上下 2 巻に及ぶ「戦争と平和」の長編には、あらゆる哲学や思想、箴言が含まれていて、とても簡単に論ずることはできません。小説の随所で「戦争とは?」「平和とは?」「人生とは?」「死とは?」と人間社会の根源的な課題に言及しています。

私はホームページに綴った原稿で五つほどに絞り分析していますが、あまりにも深すぎて力の及ぶところではない面もありました。それでも、ゆかりの地を回って、以前よりは少し理解を深めたかな?といった印象です。

関心のある方は、こちらホームページをご覧ください。ここではロシアのジューン・ブライドの美しい写真をご紹介します。

エッセイ「6月の花嫁 in Rusia」から

6 月初めのロシア文学の旅は、思いがけず楽しいシーンも用意してくれていました。訪れる先々で、幸せそうに輝く何組もの新婚カップルに遭遇したことです。

サンクトペテルブルク、モスクワ、それにトルストイの生家のあるモスクワから 200 キロ南のヤースナヤ・ポリャーナで……。出会った数は 20 組を超えていました。



- サンクトペテルブルクの寺院前。両サイドの二人は日本の仲人というより、写真のための演出用みたいな感じでした。

見たところ花婿は黒かグレーまたは白の背広か礼服でした。でも結婚式での主役はなんといっても花嫁。スラリとした白い肌に美しい金髪。白いベールと純白のロングドレスは、新緑の周囲の木々に映えて、輝くばかりに美しかった。

教会で式を挙げてきたばかりのカップルが、近くの公園や橋またはモスクワ大学の前庭などで、記念写真やビデオ撮影をしていました。

そんなグループを見つけると、私はカメラを手に急いで駆け付け、撮影グループの最後に並びました。カップルにとっては最も幸せな瞬間です。アジアからの見知らぬカメラマンが写真を撮っていたとしても気にしなかったでしょう。

それよりも、同行の通訳にロシア語でのお祝いの言葉を教えてもらい、私も大声で祝福の言葉を贈ったのです。「シャスリーバ！」（お幸せに！） そんな私の呼びかけに、なかにはニコッと微笑んで応えてくれる花嫁もいました。カップルを囲む若い仲間たちから声が上がります。「ゴーリカ！」「ゴーリカ！」。もともとはロシア語で「苦(にが)い」という意味だそうですが、そこから展開して「苦いからもっと甘くせよ！」、つまり「もっと甘いところを見せてくれ！」との呼びかけ（囃し立て）らしいのです。



そんな声がかかると、カップルはひしと抱き合い熱くながーいキスを何回も繰り返していました。カップルがキスを始めると、周囲が「アジン(1)・ドヴァー(2)・トゥリー(3)！」とその長さをカウント。それを“撮影班”が入念にカメラに収めるというわけです。私もその後列に加わったわけです。



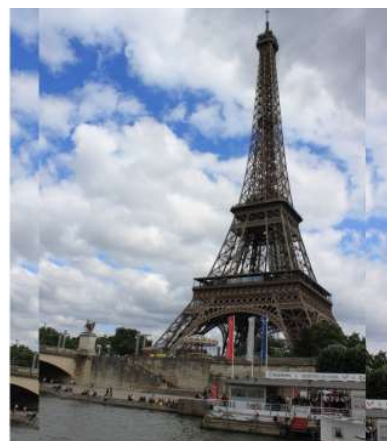
6月の日本は梅雨の季節ですが、寒くて長い冬が明け新緑が広がる6月は、ロシアでは一年で最も美しく過ごしやすい時。「June Bride」(ジューン・ブライド「6月の花嫁」)の慣習は特にないようですが、短い夏の間を最大限に生かしての“結婚式ラッシュ”なのかもしれません。

「ロシア文学紀行」という少しばかりお堅いテーマの旅は、思いもかけなかった甘い場面との出会いの連続で、心温まる楽しい旅ともなったのでした。

- モスクワ川クルーズ船から見たクレムリン
- ロシアのお土産。次々と中から同じ顔く絵>が出てくるマトリョーシヨカや弦楽器のバラライカ、・・・・・・・・など。

「レ・ミゼラブル」 “Les Miserable”

- エッフェルタワー
- パリの凱旋門



本日ご紹介する作品の最後になりました。ヴィクトル・ユゴーの「レ・ミゼラブル」の発刊から150年だった2012年、舞台となったパリを訪れました。

ここにいらっしゃる皆さまの多くはこの物語を読んだか、ミュージカルまたは映画で知っているかと思います。

- パリ市内にあるヴィクトル・ユゴー博物館
- 著者のヴィクトル・ユゴー
- ユゴー博物館のポスターに描かれていた物語の主人公ジャンバルジャンです
- 水運びにこき使われるコゼット
- 郊外にあるヴィクトル・ユゴー文学館

一切れのパンを盗んだがゆえに19年間投獄されたジャンバルジャンが、出所後に受け入れを拒まれた冷たい社会の中で、唯一、温かく受け入れてくれたミリエル司教の姿に改心し、やがて孤児コゼットを命をかけて守り育てていったというストーリーですね。

背景には当時のフランスの政治状況や革命の流れが織り込まれ、原作は深いヒューマニズムに貫かれた大河小説です。簡単にまとめることもできません。ここでは「レ・ミゼラブル」にまつわる面白い夢物語をご紹介したいと思います。

ああ、ハグできなかったマドモアゼル！

- 雨上がりのセーヌ川
- パリのほぼ中心部にあるオペラ座

パリに到着した日の午後5時、少し時間があったのでオペラ座で公演中の舞台を観賞することにしました。劇場はパリのほぼ中心にあります。

急なことだったので予約席券はありません。入り口で自由席券(100ユーロ=約13,000円)を買うと、空いていると思われる席のところに行きました。隣の席には若くて美しいフランス人女性が座っています。そこで私は英語で尋ねました。

My I take this seat? 「お隣に座ってもよろしいですか？」

彼女も私の英語がわかったらしく Sure, of course! 「ええ、どうぞ」とニコリとうなずきました。(フランスでは英語のできる人が意外に少ない。英語ができてても自国語<フランス語>への誇りから話そうとしない人もいと聞きます)。



親しみを感じた私はこの機会に、これから訪問しようとする「レ・ミゼラブル」の作品の舞台や場所について相談しようと思い話しかけました。物語の後半、ジャンバルジャンが内戦で傷ついたコゼットの恋人マリウスを背負って歩いた下水道の入り口はどこか、などを知りたかった。と、彼女は言ったのです。

「もうすぐ幕が開くから時間がありませんね。よかったら自宅にいら



っしゃいませんか。そんなに遠くありませんから」

“なんとラッキーな！” 私はオペラ座を出ると胸を躍らせながら彼女のあとについていきました。確かに家はすぐ近く、しょうやかなマンションの3階でした。

「よろしかったらどうぞ」。部屋に入ると彼女は親切にもワインを差し出してくれたのです。そして言いました。

「ゴメンナサイ。少し汗をかいてしまったからちょっとシャワーを浴びさせてね」

そう言うと彼女はバスルームに入っていました。部屋にひとり残された私はワインを口にしながら彼女の出てくるのを待っていました。

10分ほどして彼女がバスルームから出てきました。と、なんとという驚き！！

彼女はうすいピンク色のネグリジェをまとっただけなのです。スレンダーな美しい身体が透き通って見えてきます。私はショックでどこに目をやってもよいかわからず、いすに座ったまま動きがとれずにいました。と、彼女はぐんぐん私に向かって歩いてくると両手を広げたのです。私をハグしようとしているのです。

「ここで応えなければニッポン男児の名が捨たる」。私は彼女のあまりの美しさに見とれ我を忘れたように立ち上がると、思いっきり彼女を抱きしめようと両手を広げました。

ところが・・・

——その瞬間、私は夢から目が覚めたのです。時差で朦朧とした目をこすりながら、ホテルのベッドの上で枕を抱いていたのです。パリの午後5時は日本では真夜中の1時になっていたのです。

➤ 「？」

出版に関する逸話です。

発売当日は書店の前に長蛇の列ができ、本は飛ぶように売れました。

ユゴーは当初、作品の売れ行きを心配し出版社に「？」とだけ記した問い合わせの手紙を出した。

➤ 「！」

出版社からは「！」とだけ記された手紙の返事を受け取ったという。

それぞれ「売れている？」「売れて、売れて！」を意味したと思われる。

これらの2通は、世界一短い手紙であると言われています。

夢こそ未来を拓く力

最後に私がいつも思っていることを少しお話しさせていただきます。先ほどお話した「レ・ミゼラブル」の取材の際のエピソードは、寝ている（うたたねの）間にみた夢でしたが、もう一つの、もっと積極的な未来に実現しようとする「夢」は、別名で「目標」とか「希望」または「ゴール」とも言えると思います。

ユゴーも言っています。

➤ There is nothing like a dream to create the future.

「夢、これ以外に未来を作り出すものはない」



雨上がりのセーヌ川クルーズ

ドン・キホーテも老体に鞭打ちながら“見果てぬ夢”に向かって突進していきました。

Tomorrow is another day! スカーレットもすべてを失った中から、明日の夢に向かって立ち上がっていきました。

「赤毛のアン」の取材でプリンス・エドワード島でお会いした60歳で車椅子のKさんも、40年来の夢を実現された。

仮に年老いても夢を抱いている、または目標を思っていることが大事だと思います。心に描いていないことが実現することはあり得ないからです。

夢は持たなければ損。仮に夢が実現できなくても、そのことを考えているだけで楽しくなるからです。身体の老化はやむを得ないにしても、心まで枯れてしまってはいけません。



かつて札幌農学校校長のクラーク博士は言いました。

Boys, be ambitious! 少年よ大志を抱け!

私はこれをもじって、

Seniors, be ambitious! 熟年よ大志を抱け!

といつも訴えています。

世界には経済的なものだけでなく、もっとエキサイティングで大事なことがいっぱいあります。夢を描くのは子供、青年だけでなくシニアこそ必要なのです。年齢に関係なく大いなる夢を抱いていきましょう。

セルバンテスが「ドン・キホーテ」の後篇を出版したのが68歳、ゲーテが「ファースト」の総仕上げの執筆を開始したのが76歳であったと知ると勇気が湧いてきます。

ご紹介してきた世界の文学作品とそれにまつわるエピソード——皆様が何かをお感じになり、今後の人生のヒントとなり、ご参考になればこんな嬉しいことはございません。

これをもって私の話は終わらせていただきます。長時間のご清聴ありがとうございました。

➤ 長時間のご清聴ありがとうございました。